

はじめに

地球温暖化が原因で起こっている地球規模の天候異変ニュースを毎日のように耳にします。地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨など、いま地球上で起こっている様々な環境問題は、私たちの社会が自然の仕組みを破壊した結果、引き起こされたものであると指摘されています。環境問題の解決のために私たちがすべきことはたくさんあります。とりわけ教育に携わる者の役割は重大です。

いまから40年も前にアメリカの海洋学者レイチェル・カーソンは、「沈黙の春 *Silent Spring*」で、環境汚染と破壊の実態を告発し、地球環境への人々の発想を大きく変えるきっかけをつくりました。彼女は、「センス・オブ・ワンダー」という本の中で、私たちの生存基盤である自然を保全する態度を育てるには自然体験をとおして「*The sense of Wonder* = 神秘さや不思議さに目を見はる感性」をはぐくむことが重要だと指摘しています。つまり、幼少期から自然に触れることが大人になってからの環境意識に大きく影響することを説いています。

環境教育を進めるにあたって、子どもの発達に配慮することが大切です。幼稚園や小学校低学年においては、体験や感性が重要であり、学年が上がるに従い、課題発見と解決の実践力、行動を通じた思考・判断能力と、重点となるねらいが変化します。子どもたちが課題を発見し、取り組み結果を振り返る一連の過程を経て、さまざまな能力が身につくよう設計することが重要です。

さらに、環境教育は、学校園全体で取り組むことが不可欠です。各学校園の目標、目指す幼児・児童・生徒像を踏まえたうえで、全教職員が環境教育にどのように取り組み、実践するかについて共通理解しておくことが必要です。また、学年間・教科間での連携を積極的に図ることにより、環境教育の効果がより高まるのが期待できます。特に幼児・児童にとっては、地域の身近な問題に目を向けた内容を取り上げ、身近な活動から学習を始めることが有効です。また、環境保全のための取り組みを、日常生活の中でも意識的に行うことが求められます。家庭や地域社会と積極的に連携し、学校で学んだことを家庭や地域社会での生活に生かすことができるよう配慮することが必要です。

その課題解決のため、各校園においては、総合的な学習の時間をはじめ、各教科や道徳、特別活動など、教育活動全般を通じて環境教育を推進していただいているところです。このような各校園での環境教育の充実を支援するため、本年度は、壁面緑化に関する内容や環境教育研究実践校園の実践例の紹介などを大阪市教育センターのホームページ上で掲載しました。

「保護」から「保全」へ、「環境問題学習」から「体験的学習による課題解決への具体的な行動」へと環境教育の質的な変容が求められるなか、環境に配慮した行動をとることができる子どもたちを育成するために、この環境教育指導資料を活用することをお願いいたします。